

ある。だから、いつも心は平穩無事だ」と生徒に言っていたように、哲太郎は生涯この3つを大事にしました。これも聖人のようだとと言われるようになった一つの理由です。

また哲太郎は26年間、代用教員として終始しました。普通は数年で代用教員から正教員になるのですが、正教員になると文官服を着て腰に剣を吊らなくてはなりません。哲太郎は「教育は威圧ではない。子どもを啓蒙し育てるもので、役人根性を以てこれを律することは教育の道に反する」という強い信念を持ち、何度も正教員にしようとする周囲の動きを固辞しました。

このように哲太郎は自分自身を律しつつ、教育にも強い信念と情熱をもって取り組んでいました。

加えて、その穏やかな人柄と法律に詳しいことから、学校のみならず大甲に住む住民にも慕われ、良き相談相手としてその後も親しまれました。時には哲太郎自身が代弁者となり、警察や弁務署に出向き問題を処理し、常に台湾の人たちの味方だったようです。

公学校も次第に大きくなり順風満帆であるかのように見えたが、開学当時から一緒になって子どもたちの教育に尽力してきた金子政吉校



去年12月、哲太郎生誕の地・津森地区に建立された顕彰碑

長が同僚のやつかみにより辞職。その後任の校長とは、考えの違いや哲太郎が生徒に慕われていたため嫉妬されたことなどにより、農園管理を宣言される形で事実上教職を罷免されました。その背景には、台湾総督府が日本語の普及に伴い漢文教育を廃止するなど、台湾文化を軽視するような施策をとっていたことに、哲太郎が異議を唱えていたという事情もありました。

教師としての道を絶たれた哲太郎はその年、遊泳池で入水し、自らの命を絶ちます。民族平等という観点から、台湾総督府に反省を促すため、自決に及んだと考えられています。

激動の時代に、台湾で教師としての信念を貫いた哲太郎は、台湾の人たちに惜しまれながら、59歳でその生涯を閉じたのでした。

## 志賀哲太郎顕彰会



みやもと むつひと 会長  
宮本睦士

私は文化財保護委員を長年やっていて、「志賀哲太郎顕彰会」の名前は知っていました。あるとき、知り合いの方に、志賀哲太郎先生について書かれた本を見せていただき、先生の人柄や業績について知っていくうちに関心が深まり、志賀哲太郎顕彰会の一員となりました。

私自身、教師をやっていたので、自分と重ね合わせて彼を知れば知るほど、「なぜ？」が増えていきました。

教育者としての業績をここまで挙げつつ、なぜ人格者としても秀でていたのか。これを2つとも両立するというのはなかなか困難なことですから、そういった面で彼に魅かれていきました。

また私は益城町の津森出身ですが、益城町に住む子どもたちに、こうして国際的に活躍し、かつ人格的にも優れた人が、こ

こ益城町から生まれたのだということをもつと知ってほしいという思いもあつて活動を続けています。

今回、さまざまな人の力を借り、12月に志賀哲太郎先生の顕彰碑を建てることができ、非常に感謝しています。

本会副会長の植山洋一さんの発案により、顕彰碑の台座に志賀先生の生誕の地である中村家の石垣の石と、渡台以来ここ益城町への帰郷が叶わなかった先生の魂を里帰りさせることに繋げて大甲区の大安溪という河原の石を現地の方々に送っていただき使用しました。

大甲区から石材を搬出するにも関係者の大変なご尽力があり実現できたのですが、特に大甲区の紀伊文吉さんを始め、王澤佳副区長など現地の皆さんは何度も石を探しに出向かれ、1個が20キもある3つの石を選び送ってくださいました。こういったことから、今もお志賀先生が大甲の地で敬われ、愛されていることを知ることができ本心に嬉しく思いました。

【参考資料】志賀哲太郎顕彰会「志賀哲太郎資料集」／台北市観光傳播局